

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 7日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20242016

研究課題名（和文）東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Studies on forms and materials of administrative documents from East Japan and Asian regions in the pre-modern era

研究代表者

山本 隆志（YAMAMOTO TAKASHI）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：50191416

研究成果の概要（和文）：東国文書では色部文書全体の形態・料紙を顕微鏡等を用いて調査し、全体の傾向としては楮紙で通常形式が多いが、戦国末期の書状には東国に特徴的な形式が少なからず見え、中には雁斐紙があること等を解明した。東アジア文書では沖縄の尚家・上江洲家文書を調査・整理し、楮紙が多いことと竹紙・芭蕉紙が混在することを確認した。韓国・中国では伝統的製紙の現場を視察するとともに17世紀以降の文書も調査して楮紙が多いことを確認した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, materials and forms of administrative documents of Irobe in East Japan were examined by the microscope. According to our analysis of these documents, these were generally made from kozogami, but we found out that some documents were made from ganpi-paper. It is the characteristic forms of East Japan in the late Sengoku-period. Secondly, we examined documents in East Asia, especially that of family Sho and Uezu in Okinawa. Many of these documents were made from kozogami, but also some of that from chikushi and bashoshi. Thirdly, we inspected the traditional paper mill in Korea and China, while we investigated old documents since the 17th century in this area. It is confirmed that many of these documents were made from kozogami.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合 計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2008年度 | 5,300,000 | 1,590,000 | 6,890,000 |
| 2009年度 | 4,200,000 | 1,260,000 | 5,460,000 |
| 2010年度 | 3,800,000 | 1,140,000 | 4,940,000 |
| 2011年度 | 4,200,000 | 1,260,000 | 5,460,000 |
| 年度 | | | |
| 総 計 | 17,500,000 | 5,250,000 | 22,750,000 |

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：料紙繊維、色部文書、尚家史料、上江洲家文書、東アジア古文書料紙研究集会、礼節体系、楮紙、雁斐紙

1. 研究開始当初の背景

古文書料紙については上島有「中世文書の料紙の種類」（1991年）が様式・機能と

関連づけて体系化しているが、中世文書の種類として奉書Ⅰ・檀紙・奉書Ⅱ・奉書Ⅲ・美濃紙・宿紙・斐紙・その他雑紙、の8分類を

提示していた。これに対しては奉書などは近世に登場するものであり中世における歴史的名称との関連があきらかでなく、それぞれの組成成分の言及がなく、賛同はすくなかった。それに対して富田正弘は湯山賢一らとの共同研究（平成6～9年度科学研究費補助金総合研究A「古文書料紙に見る材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究」、代表富田正弘）で、中世文書の原本を実際に調査して、料紙の厚さ・重さ・質目・板目・刷毛目・紗目を計測・観察し、繊維の太さや密度を顕微鏡観察した。その結果、鎌倉時代までの古文書料紙に用いられていた檀紙にかわって室町時代には強杉原紙や杉原紙が主要になることが判明した。また中世文書料紙の種類と歴史的名称との関連に関しても富田正弘「古代中世における文書料紙の変遷」（1996年）にて上島の体系論を補充した。また富田・湯山は中世文書から近世文書への移行過程を把握するために共同研究を行い（平成15～19年度科学研究費基盤研究A「紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代測定に関する基礎的研究」、代表富田正弘）、添加物として加えられた米粉を顕微鏡観察で識別できることを指摘し、米粉を含む杉原紙・奉書紙と含まない檀紙・強杉原・美濃紙があることを解明した。一般行政文書は、このように、鎌倉期までの檀紙、室町期の強杉原・杉原、江戸期の大高檀紙・奉書紙と推移してゆくことが分かってきたが、この変遷過程がどのように進行するか、新しい研究課題である。

以上の研究現状は京都を中心とした畿内の文書の調査に基づいているが、東国の文書についての調査・検討が求められている。また楮紙の紙質偏差で変遷してきた和紙の特徴は、中国・韓国・琉球と比較することも古文書料紙を東アジアの規模で考察するに緊要の課題となっている。

2. 研究の目的

日本列島における前近代古文書料紙の発展は、第一に麻紙ではなく楮を核にして展開してきたこと、第二に鎌倉時代の檀紙・引合に見られるように中国・朝鮮の水準を凌いだこと、第三に南北朝以降には斐紙・楮紙の使用がはじまり楮紙は美濃紙・奉書紙など多様になること、が特徴として確認されている。本研究では、このような日本列島の前近代文書の展開を、東国地域および東アジア諸国（中国・朝鮮・琉球等）の一般行政文書の原本を調査し、いままで調査を積み重ねてきた畿内近国のそれと比較検討すること、そして東アジア諸国での文書料紙の展開過程に見通しをつけることを目的とする。

3. 研究の方法

（1）室町・戦国時代における東国地域の武士が発給した文書を原本調査する。具体的には①新潟県立歴史博物館色部文書、②東北大学図書館秋田家史料、③茨城県立歴史館芹沢文書、などの原本を調査しデータを整理する。

（2）東アジア諸国の12世紀以降の一般行政文書について、その原本にあたって調査する。具体的には①中国清华大学劉研究室文書、韓国安東柳氏文書、琉球尚氏文書、同上江洲家文書などを調査する。

（3）文書料紙の調査では、①文書料紙の縦横の寸法・厚さ・重量・質の目本数・糸目幅、②料紙表面の板目・刷毛目・紗目・吊皺、③繊維の状態や不純物残存状況、添加物状況などを観察し、調査データとしてまとめる。

（4）古文書料紙の科学的調査と比較するためにも、古文書料紙の製作実験を、高知県紙産業技術センターにて実施する。

4. 研究成果

（1）東国地域の文書としては、新潟県立歴史博物館色部文書の全点、東北大学図書館秋田家文書の秀吉期書状、茨城県立歴史館芹沢文書全点、白石市遠藤家文書戦国期史料、を調査し、データ・ベース化した。その一部は筑波大学山本隆志研究室ホームページで公開している。その結果を検討し、以下のことが明らかとなった。①色部文書679点について。紙質は、楮紙631点、斐紙39点、斐・楮混合5点、楮・楮混合4点に分類される。私文書のうち、議状9通は楮紙・堅紙で法量も幕府発給文書に近いが、室町後期には小さくなる。起請文26通（案12通）は楮15通・斐紙9通・斐楮混合2通で、堅紙8通・続紙第二紙4通の法量はほぼ縦25センチ・横30センチである。書状87通は堅紙24通、切紙8通、小切紙2通、堅切紙15通、准堅切紙9通、折紙22通、続紙4通、巻紙1通、不明2であるが、ここで堅切紙・准堅切紙の多いのが注目される。その堅切紙・准堅切紙の書状は戦国末期に増大するが、紙質は斐紙9通・斐楮混合3通で、その4割をしめる。封式では横内折が26通見られるが、斐紙・堅切紙が7通ある。

②遠藤家文書は戦国期の36通はすべて書状であるが、その特徴は以下の通りである。差出者は奥州各地の領主である。形態は堅紙28通、堅切紙7通、切紙1。紙質は楮紙11通、斐紙21通、斐楮混合4通。封式は横内折22通、通常13通、縦外折1通。戦国末期に斐紙や斐楮混合紙が増加していることがわかる。

③色部文書・遠藤家文書の調査・整理・検討の結果、戦国期の書状には楮紙・堅紙の通常形式のほかに、斐紙・堅切紙・横内折のものが少なからず存在し、戦国末期に急速に増加していることが指摘できる。このことは芹沢

文書についても指摘できる事柄である。

(2) 東アジア諸国の文書について。①中国の製紙技術の変遷につき、2010年3月に中国自然院自然史科学研究所にて研究集会を開催し、同研究所の陳松報告「中国の製紙技術起源についての再検討」・方曉陽報告「現代宣紙の表面分析」を受けて意見交換した。また清華大学劉曉峰副教授研究室所蔵文書・山東建築大学姜波副教授蒐集文書の原本を調査し、清代売券類は楮紙であることが判明した。さらに山東省紙房村にて桑を原料とする紙製作を視察し、紙製作の多様性を確認した。②朝鮮の文書については、2010年に東京大学にて開催した日韓研究集会にて、朴竣鎬が文書礼節体系を、宣承慧が楮木・楮紙をめぐる日朝交流のあり方を発表した。また2011年7月には安東柳家文書・清洲国立博物館所蔵文書を調査して楮紙が主流であることが確認できた。③琉球文書では、那覇市歴史博物館所蔵の尚家文書約250点と久米島上江洲家文書約170点を調査し、江戸時代の琉球では中国からの竹紙、日本列島からの楮紙、琉球製作の芭蕉紙が混在して使われていることが確認できた。主流は楮紙であり、竹紙はすくない。

(3) 高知県紙産業技術センターにて、①平成20年には古代の楮紙・麻紙の復元、②平成21年は近世美濃紙、鳥ノ子紙、間似合紙の復元、③平成22年はネリにサネカズラを使用して引合紙を製作し、また楮打紙の製作、④平成23年は三極紙製作と楮・雁斐混合紙の製作、を実施した。いずれの実験でも製作に成功し、研究代表者・分担者のもとに現物が保管されている。

(4) 製紙技術についての総括的展望

日本の製紙変遷について、2012年1月に開催した成果発表会にて、研究分担者の湯山賢一は次のような展望を提示した。

①中国前漢時代の出土遺品から、蔡倫以前に紙が出現していたことが確認できるが、それは薬の包装などに用いられたのであり、文字を書く紙を製作する技術を集大成したのは蔡倫である。その技術は樹皮を紙薬(ネリ材)を使用することで効率的に紙を漉くことを可能にしたのであり、この技術が日本列島にもたらされた。

②延喜式に見える、煮・択・截・舂・成紙の工程は、中国で南北朝から隋・唐前期に至るまで、写経料紙や古文書などの高級料紙の製作過程には同様に用いられていたと考えられ、紙料調査には何らかのネリ材が不可欠であった。しかし抄紙の効率化のなかで、截・舂に手間のかかる麻紙は中国では唐代前期、日本では奈良時代後期には楮系の原料に変わっていた。大陸では宋代の印刷技術の発展を契機に竹紙生産が飛躍的に展開した。竹紙

は截はないが、舂工程に至るまでの時間が長く、楮・桑などの皮紙の良質紙は截工程が近代でも行われていた。

③日本では、公文書・典籍写経紙は截工程が継続して行われていたが、いっぽうでは楮繊維の特徴を生かして截をしない効率的抄紙法が行われるようになった。截を行うのが檀紙であり、行わないのが杉原紙である。

④楮における截の痕跡は室町時代檀紙までは見えるのであり、その最高が引合である。料紙の三要素(素材・料紙製作工程・漉き方)から見て、杉原に代表される楮系の製作過程で截過程を省略した抄紙技術の展開が、効率的生産を可能にし、良質な和紙を豊富にもたらした要因と考えられる。この製紙技法を可能にした道具に、上下に枠のある桁の存在があることは「和漢三才図絵」が指摘している。

5. 主な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計27件)

- ①湯山賢一、紙の修復と保存、査読有、化学と工業、64-4、2011年、326-328頁
- ②小島浩之、中国古文書学に関する覚書(上)、査読無、東京大学経済学部資料室年報2、84-94頁
- ③山本隆志、東国における武士と法会・祭礼との関係―足利鐔阿寺・宇都宮神宮寺一切経会を中心に―、査読無、歴史・人類、39号 2011年、3-49頁
- ④富田正弘、古文書料紙研究の歴史と成果―檀紙・奉書紙と料紙分類―、査読無、東北中世史研究会会報、20号、2011年、1-47頁
- ⑤湯山賢一、古代料紙論ノート―延喜式にみる製紙工程をめぐる―、査読無、正倉院紀要、32号、2010年、71-84頁
- ⑥石田実洋・橋本雄、壬生家旧蔵本『宋朝僧捧返牒記』の基礎的考察、査読有、古文書研究、69号、2010年、14-34頁
- ⑦小島浩之、東京大学総合図書館蔵外文庫「明代勅命」管見、査読有、漢字文献情報処理研究、10号、2009年、4-16頁
- ⑧朴竣鎬、韓国の古文書形式と礼制体式 査読有、古文書研究、67号、2009年、1-13頁

[学会発表](計10件)

- ①湯山賢一、「料紙の変遷表」覚書、日本古文書学会、2011年9月24日、國學院大學
- ②山本隆志、関東管領上杉家の成立、米沢市上杉博物館開館10周年記念特別展講演会、

- 2011年5月7日、米沢市上杉博物館②
富田正弘、いま古文書料紙研究では何が問題なのか、日本古文書学会、2010年9月25日、松山市にぎたつ会館
- ③富田正弘、古文書の働きと料紙、東北中世史研究会、2010年1月8日、東北大学図書館
- ④湯山賢一、日本における古文書料紙の変遷、東アジア古文書料紙日韓研究集会、2009年12月13日、東京大学経済学部
- ⑤小島浩之、東京大学総合図書館蔵外蔵明代勅命について、東アジア古文書料紙日韓研究集会、2009年12月13日、東京大学経済学部
- ⑥大川昭典、典具帖紙の製作過程（高知県特産紙の紹介）、東アジア古文書料紙日韓研究集会、2009年12月13日、東京大学経済学部
- ⑦朴竣鎬、韓国の古文書形式と礼制体式、東アジア古文書料紙日韓研究集会、2009年12月13日、東京大学経済学部
- ⑧宣承慧、朝鮮時代における倭紙の記録について、東アジア古文書料紙日韓研究集会、2009年12月13日、東京大学経済学部
- ⑨大川昭典、材料から見た和紙の歴史的変化、第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会、2009年11月13日、東京国立博物館

〔図書〕（計7件）

- ①山本隆志、東国における武士勢力の成立と展開、思文閣出版、370頁、2012年
- ②山本隆志、那須与一伝承の誕生、ミネルヴァ書房、255頁、2012年
- ③柳原敏昭、伊達家重臣遠藤家文書・中島家文書、白石市、120頁、2012年
- ④柳原敏昭、中世日本の周縁と東アジア、吉川弘文館、346頁、2011年
- ⑤丸島和洋、戦国大名武田氏の権力構造、思文閣出版、405頁、2011年
- ⑥湯山賢一、文化財と古文書学一筆跡論一、勉誠出版、294頁、2009年

〔その他〕

ホームページ等

<http://tyamamo.web.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 隆志 (YAMAMOTO TAKASHI)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：50191416

(2) 研究分担者

湯山 賢一 (YUYAMA KENNITI)

独立行政法人国立文化財機構・奈良国立博物館・館長

研究者番号：00300690

林 譲 (HAYASHI YUZURU)

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：00164971

柳原 敏昭 (YANAGIHARA TOSHIKI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30230270

橋本 雄 (HASHIMOTO YU)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50416559

小島 浩之 (KOJIMA HIROSHI)

東京大学・大学院経済学研究科・講師

研究者番号：70334224

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

富田 正弘 (TOMITA MASAHIRO)

富山大学・名誉教授

大川 昭典 (OOKAWA AKINORI)

高知県紙産業技術センター・元部長

本多 俊彦 (HONDA TOSHIHIKO)

高岡法科大学・准教授

吉川 聡 (YOSHIKAWA SATOSHI)

奈良国立文化財研究所・文化遺産部・部長

七海 雅人 (NANAMI MASATO)

東北学院大学・文学部・教授

前嶋 敏 (MAESHIMA SATOSHI)

新潟県立歴史博物館・主任研究員

丸島 和洋 (MARUSHIMA KAZUHIRO)

中央大学・文学部・兼任講師

門口 実代 (KADOGUTI MIYO)

三重県立博物館・主事